

利尻島におけるウミネコの繁殖地

小杉和樹

日本野鳥の会道北支部会員

(〒097-04 利尻町沓形字富士見町)

はじめに

利尻島で繁殖するカモメ類は、ウミネコ(*Larus crassirostris*) とオオセグロカモメ (*L. schi-sagus*) の2種である。ウミネコは毎年3月上旬に利尻島へ渡来し、繁殖期間を経て11月中旬には渡去する。一方オオセグロカモメは一年を通して観察され利尻島では留鳥とされている(小杉 1988)。これまでこれら2種の繁殖地は、利尻島北部の海岸崖地に集中する傾向にあったが、1987年

から利尻島北西部の牧場という特異な環境にウミネコが繁殖地を形成するようになった。これらの状況については、すでに報告(西谷、小杉 1988, 小杉 1989)しているが、本報では1990年の調査を追加し、利尻島におけるウミネコ繁殖地と、その状況について報告する。また、その新たな繁殖地形成に因るとされる既存の北部海岸域繁殖地の変化と併せて、ウミネコ繁殖地の移動について考察した。

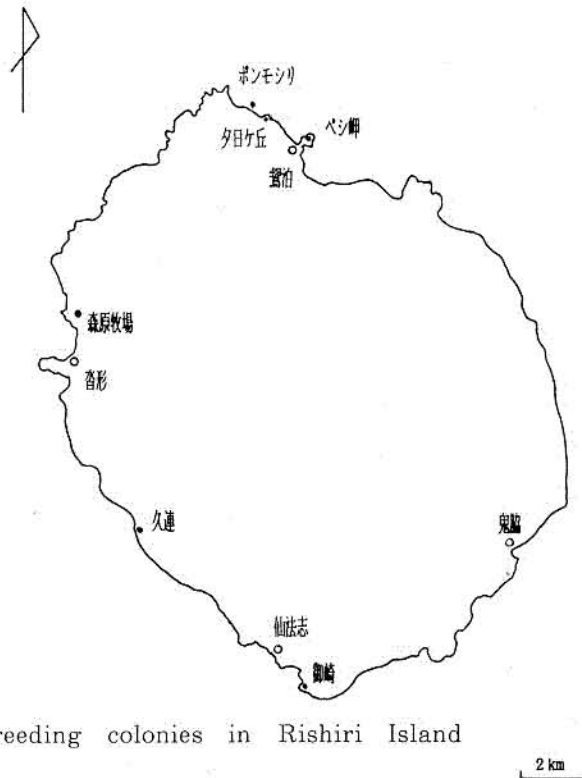


図1. 繁殖地の位置

Fig1. Locations of breeding colonies in Rishiri Island

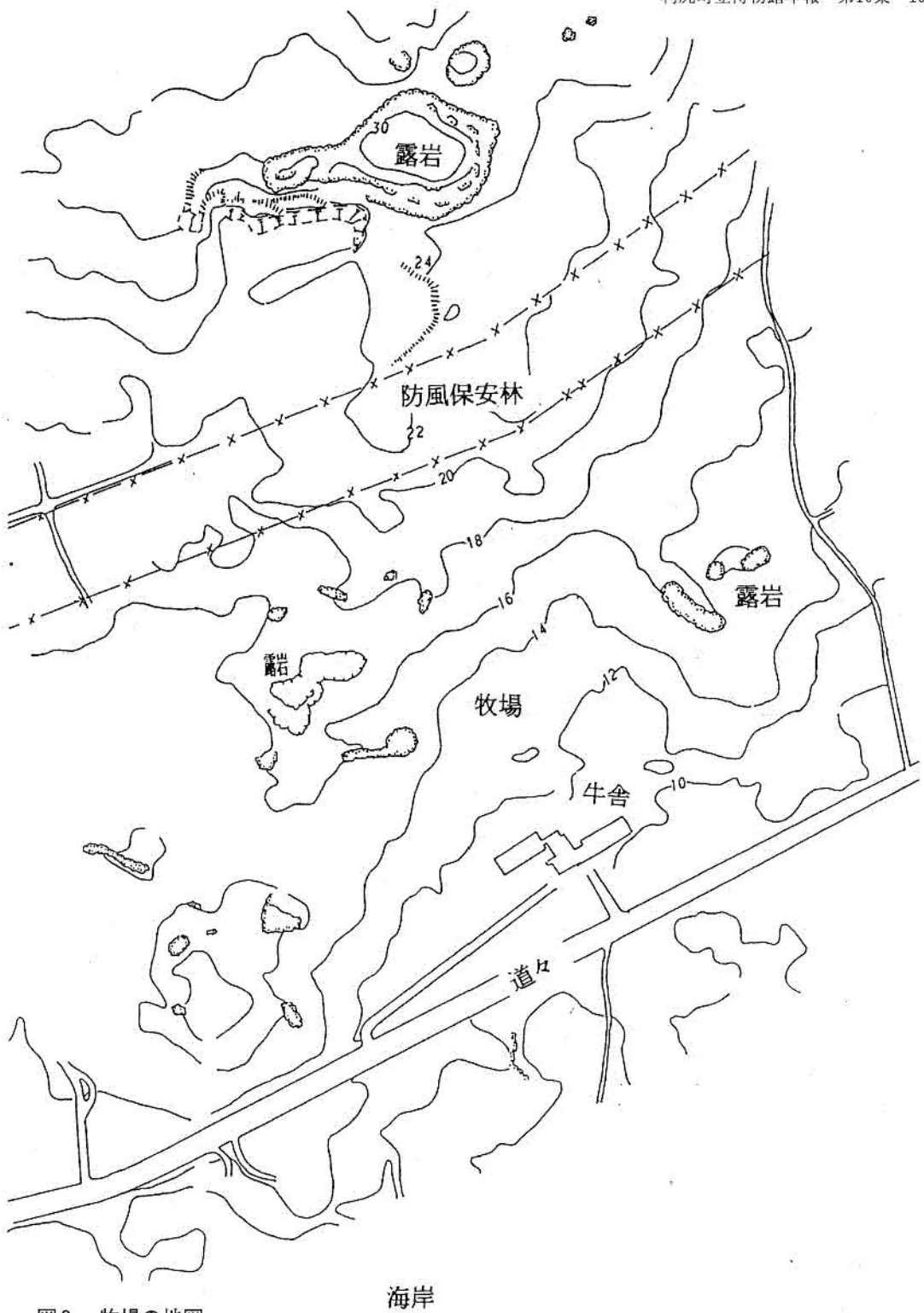


図2. 牧場の地図

Fig2. Map of the study area, Morihara-meadow

調査地

利尻島におけるウミネコ、オオセグロカモメの繁殖地を図1. に示した。

繁殖地は現在大きなところで4ヶ所確認されており、そのうち3ヶ所はペシ岬、夕日ヶ丘、ポンモシリで北部海岸線の約2Kmの範囲に点在している。外の1ヶ所は、西部の牧場内に形成された繁殖地で、北部海岸域繁殖地から8Km離れている。

ペシ岬は、標高93mの鴛泊港西側に突き出た岬で、頂上まで遊歩道がついており夏期の観光シーズンには多くの人々が往来する。また、遊歩道を境に西側が断崖、東側が草付きの急斜面となっている。ここでは1979年7～8月にウミネコ480羽の観察と繁殖報告(早稲田大学生物同好会 1980)があるが、現在はオオセグロカモメだけが営巣している。

夕日ヶ丘は、標高58mと低くはなるがペシ岬とよく似た地形であり、遊歩道を境に西側が断崖、東側が草付きの斜面となっているのも同様である。ここでも、オオセグロカモメだけが営巣している。

ポンモシリは、前述の夕日ヶ丘より西側500m程の岸から100m程離れた小さな島で、南側半分が草付きの斜面で、北側半分が断崖になっている。ここではウミネコとオオセグロカモメが繁殖しており、南側の草付き斜面にウミネコが営巣し、北側断崖にオオセグロカモメが営巣している。

新たな繁殖地の牧場内は、島内を循環する道々に面した広さ約100haの島内唯一の牧場である(図2)。営巣は1987年から大規模になったものの、その兆候は1986年からあったと牧場主は話している。繁殖等の状況について調査をしたのが1988年からであり、それ以前の状況は不明である。

調査方法

調査は、1988年6月19日に牧場内におけるウミネコの成鳥数等のカウントを行うことから始め、

1週間後の6月26日には同所の営巣数及び範囲の調査と、北部海岸域の3ヶ所の成鳥数と営巣状況を調査した。カウントは、繁殖地内の調査時点における実数であり、1回の目視によるカウントと写真とで行った。繁殖地内の営巣数等については実数をカウントし、営巣箇所、範囲を把握した。そして、これらと同様の調査を1989年、1990年も行った。ただし、筆者の都合で1990年は調査回数が極度に減った。

調査結果

1. 1987年

1987年では、営巣数、成鳥数ともに不明であるが、繁殖地の範囲は牛舎南側の露岩を中心とした小規模なものであった(図3-1)。

2. 1988年

6月19日に牧場内繁殖地の成鳥数のカウントを行い、約8,000羽によって形成されていることが判明した。そのうちウミネコの若鳥は36羽と少なく、外にはオオセグロカモメ3羽が観察されたが、これらは営巣していなかった。

1週間後の6月26日には、繁殖地内に入り営巣数及び営巣範囲の調査を行った。その結果、営巣数は988巣であった(表1)。営巣は、枯れ草等で産座が確実に造られているものをカウントした。営巣範囲は1987年の3倍を越える程に広がり(図3-2)、露岩を中心とした1987年形成部分の営巣密度が高く、1988年に拡大した繁殖域は密度が低くなっていた。また、営巣は露岩のくぼみを利用したもの、露岩と草地の境に造られたものが多いものの、丈の低い草地に枯れ草を簡単に敷いたものもかなり見られた。

同日、北部海岸域繁殖地のペシ岬では、西側断崖にオオセグロカモメの営巣が10巣確認できただけで、ウミネコの営巣は無く少数が海岸に観察されただけである。夕日ヶ丘では、北西側の断崖に

表1. 繁殖地内の営巣、卵、雛数(1988.6.26)

Table 1. Number of nests, eggs a chicks (1988.6.26)

巢 nest	卵 egg	雛 chick	卵、雛の無い巢 nests of no eggs or no chicks
998	522	446	374

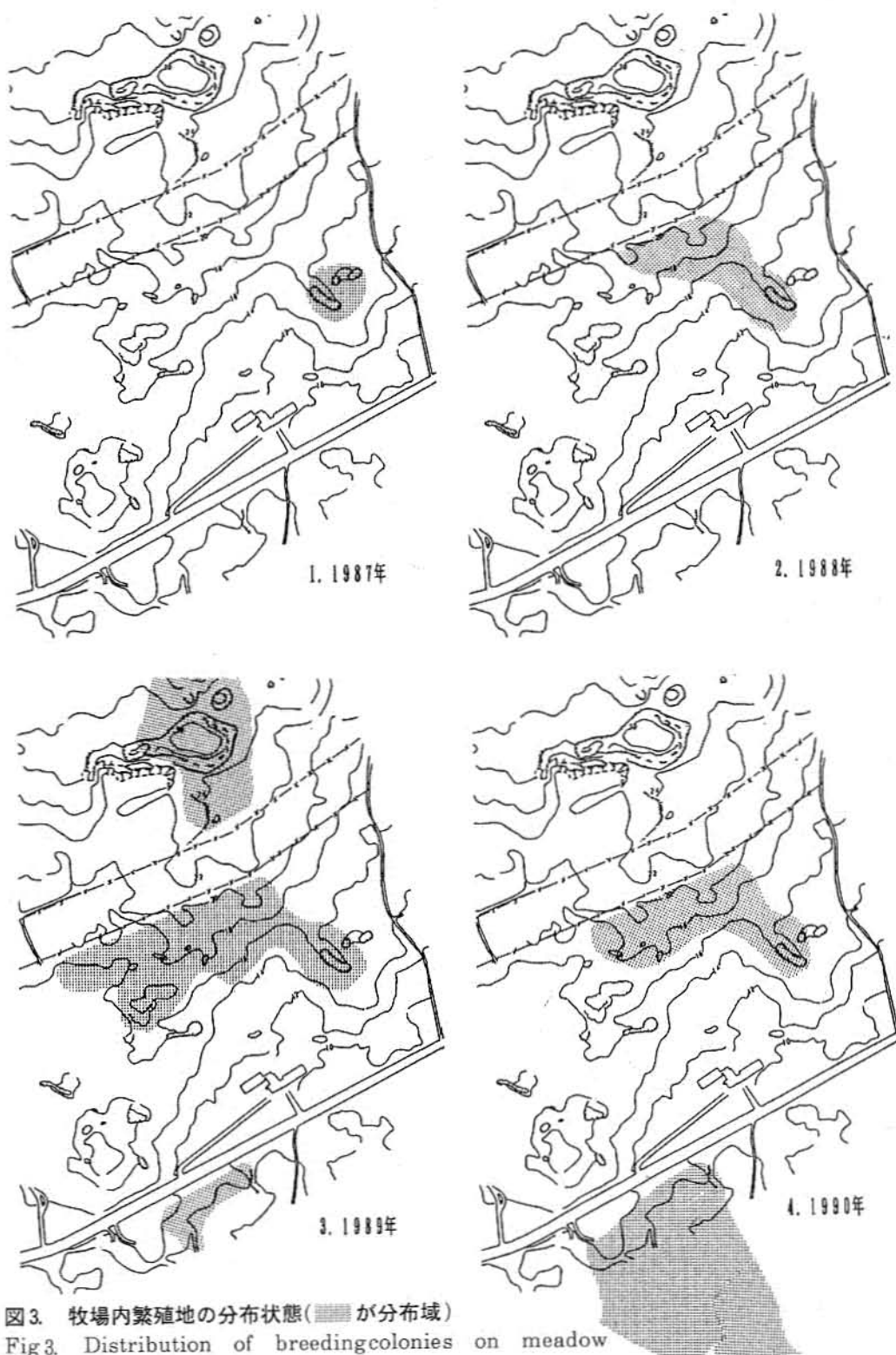


図3. 牧場内繁殖地の分布状態(■が分布域)

Fig.3. Distribution of breeding colonies on meadow

オオセグロカモメの営巣が確認されたが、ウミネコの営巣は確認されなかった。ポンモシリでは、前述のとおり北側の崖地にオオセグロカモメが営巣し、南側の草地にはウミネコが営巣していた。北側崖地のオオセグロカモメの繁殖地は、夕日ヶ丘から状況を観察することができ、確認した営巣数は60巣であったが、死角になっている部分が多いため、その数を上回ると思われた。反対に南側の草地は、対岸の海岸から観察することはできたが、イワノガリヤス (*Calamagrostis langsdorffii*) の丈が高く営巣等の詳細な確認は困難であった。ただし、草地と岩場の境にオオセグロカモメの営巣を3巣確認した。また、ポンモシリでのウミネコ成鳥数は200～300羽程度であった。

3. 1989年

3月12日、繁殖地付近の新湊漁港にウミネコの群れが観察され、その後数は日増しに増加した。

3月21日、牧場内の繁殖地に対して「フン公害、漁業産物への被害」防止を目的に防鳥テープが張り巡らされた。最初ウミネコは、そのテープを嫌い牧場内に降りなかったものの、数日後にはそれに慣れて牧場内に降りるようになった。

3月25日、牧場内及び北部海岸域の繁殖地にウミネコは観察されず、ポンモシリでオオセグロカモメの交尾を観察した。翌、3月26日もオオセグロカモメがほとんどでウミネコは岸近くに20羽だけであった。

3月27日、牧場草地の野焼きが行われ、翌3月28日と4月1日にポンモシリにおける成鳥数のカウントを行い3月28日が60羽、4月1日が800羽で夕日ヶ丘にも20羽観察された。この間、牧場内でのウミネコの観察はなかった。また、4月4日～5日に新湊漁港と栄浜漁港にそれぞれ1,800羽と1,200羽が夕方に観察されたものの、やはり牧場内には観察されなかった。その後、4月7日から牧場内にウミネコが観察されるようになった。

5月11日と5月21日に、牧場内の営巣状況の調査を行った。5月11日には既に抱卵しているものが5巣あった。繁殖地の範囲は1988年を更に上回り、牛舎東側の防風保安林を超えて広がっているものと、道々を挟んで海岸側にも営巣していた(図. 3-3)。その時点で成鳥数のカウントをしたかったが、1988年を明らかに上回っており、一人では困難な状況であったために断念した。5月

21日には防風保安林より上部の調査をし、成鳥数約3,000羽と抱卵している巣を10巣確認した。

5月28日、ポンモシリと夕日ヶ丘の成鳥数の調査をした。ポンモシリではウミネコ50羽とオオセグロカモメ450羽、夕日ヶ丘ではウミネコ10羽とオオセグロカモメ100羽が観察され、夕日ヶ丘のオオセグロカモメは抱卵しているものもあった。

6月10日、牧場内の成鳥数のカウントをした。繁殖地に定着した時点での成鳥数とは比較にならない程の少数となり、1988年部分で2,640羽、防風保安林より上部の1989年部分で1,390羽の合計4,030羽であった。これは、この牧場内の繁殖地が何らかによって荒らされたことに因るわけで、産座は数多く存在しているのに、その中に卵はほとんど無かった。

6月14日、ポンモシリと夕日ヶ丘の成鳥数を再度カウントする。ポンモシリではウミネコ1,700羽とオオセグロカモメ28羽が観察されたが、実際の繁殖地となっている南側草付きの斜面での数は450羽で外の1,250羽は岸や上空で観察されたものである。また、抱卵しているものは少なく、オオセグロカモメの営巣がその中に19巣確認された。夕日ヶ丘では10羽のウミネコとオオセグロカモメ150羽であったが、ウミネコの営巣は確認できなかった。

6月26日、牧場内の繁殖地を観察するが、状態は悪化する一方で卵はほとんど無く、道々から海岸側の繁殖地では成鳥数が増加していた。

その後、7月7日にウミネコは繁殖地を放棄した。

4. 1990年

3月30日に繁殖地への定着がみられ、6月9日に成鳥数、営巣数及び形成状況を調査した。その結果、営巣範囲は牧場内において密度が低くなっていることと、防風保安林より上部に営巣が無いことの他は1989年と変わらなかったが、海岸側では膨大な広がりが見られた(図. 3-4)。成鳥数は、牧場内に1,900羽、海岸側に800羽の合計2,700羽を観察した。営巣数は牧場内に1,125巣、海岸側に480巣の合計1,605巣あった(表. 2)。また、オオセグロカモメの成鳥6羽と営巣抱卵しているものが1巣あった。

6月30日～7月1日、これまで懸案であった繁殖地内の雛鳥に対しての標識装着をすることが出

表2. 繁殖地内の営巣、卵数 (1990. VI. 9)
Table 2. Number of nests and eggs (1990. VI. 9)

	巣 nest	卵 egg	卵の無い巣 nests of no eggs
牧場内 meadow	1,125	765	522
海岸側 seashore	480	267	306
計 total	1,605	1,032	828

表3. 繁殖地内雛のバンディング数 (1990. VI. 30~VII. 1)
Table 3. Number of nests and eggs (1990. VI. 9)

	牧場内 meadow	海岸 seashore
数 number	104	31
足環番号 band number	09 A 16001-16062, 16101-16142	09 A 16063-16076, 16143-16159

来た。バンディングは苫小牧市在住の三浦二郎氏の指導のもと、135個体に標識が装着された。参考までに、足輪番号を表3に示した。

7月22日、ポンモシリで若鳥が飛んでいるのを確認したが、牧場内では未だであった。

8月15日、牧場内の繁殖地から全てが巣立ちした。海岸側では、それより1週間遅れた。

考察

1. 繁殖地間の関係

1987年以前の観察記録が不十分であるため、それまでにどのような変化が北部海岸域の繁殖地にあったのか、まったく不明である。また、ペシ岬でのウミネコ繁殖の報告がされていることから、1979年から1987年の8年間にここでの繁殖地が消滅し、移動したことは明確であるものの、この変化が牧場内繁殖地の形成と時期が同時であるのかも不明である。

1989年は、ウミネコが初認された時期からポンモシリにおける個体数が前年度より減少し、牧場内繁殖地付近に早い時期から多くの個体が観察された。しかし、3月28日に牧場内の野焼きが行われると、牧場内では一時的に繁殖地が消滅したよ

うになり、逆にポンモシリを中心とした北部海岸域の繁殖地で多くのウミネコが観察されるようになった(図4.)

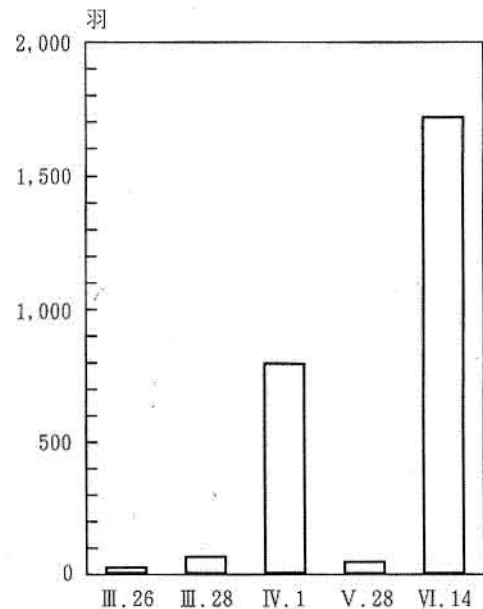


図4. ポンモシリで観察されたウミネコ数
(1989. III. 26~VI. 14)
Fig4. Number of Black-tailed Gull in Ponmoshiri.

これらの変化は、牧場内繁殖地形成の初期に前年ポンモシリで繁殖していた個体群が、牧場内繁殖地に移動していたことによるのではないだろうか。このことから、北部海岸域繁殖地からの移動群が牧場内繁殖地形成の一部であり、北部海岸域繁殖地の減少と、牧場内繁殖地の増加に関連性があったと考えられる。

2. 移動の要因

移動の要因については、オオセグロカモメとの関係と繁殖地環境の悪化が挙げられる。特にオオセグロカモメとの関係については、近年北海道でもその個体数の増加が報告（綿貫ほか 1988）されている。また、道東のユルリ島では両種間の関係によるウミネコ繁殖地の消滅が報告（近藤ほか 1986）されている。

利尻島においても、1989年に久連地区の海上の岩場に2巣と、御崎地区の海岸の断崖に1巣が営巣した。久連地区のものは2度抱卵したものの、2度とも波に流され繁殖に失敗したが、御崎地区では2羽が巣立ちした。そして、1990年には御崎地区で海上の岩場に10巣が営巣し、ほぼ全てが巣立ちした。久連地区でも海岸の断崖に場所を移して1巣が営巣し、2羽が巣立ちした。このように集団繁殖をする傾向にあるオオセグロカモメが1番いもしくは、極少数で繁殖していることから、既存の繁殖地が飽和状態になり、ウミネコの繁殖地内に進行していることは十分に考えられる。

繁殖地環境の悪化については、ベシ岬と夕日ヶ丘では前述のとおり繁殖時期と観光シーズンが重なるため、人為的な影響を受けやすい地域であることは明確である。しかし、開発行為が繁殖地に直接及んでいる等の事実は無く、断崖等の崩壊や草付き斜面が徐々に断崖化している等の変化は非常に緩慢であり、ごく軽微である。また、牧場内繁殖地での人的な圧力が加わった時に、夕日ヶ丘にもウミネコが観察されだしたことは、繁殖のできる環境が未だあるということが伺える。このことから、ウミネコが新たな繁殖地に移動しなければならなかった程の環境変化は無く、むしろより好適な環境を求めた結果ではないのだろうか。

3. 繁殖地環境の選好性

ウミネコがどのような環境を好むのかについては、ポンモシリ繁殖地でも草付き斜面の部分で営巣していることから、草地を好む傾向にあること

が伺えるが、牧場内繁殖地の調査では、牧場内の露岩に集中しその岩のくぼみに営巣するか、岩と草地の境に営巣している。それらの場所が飽和状態になると、草地へと拡大していたことから基本的には、岩地を好む傾向にあって、草地が次の順位になると考えられる。ポンモシリ繁殖地の実態は、南側草付き斜面の中にオオセグロカモメの営巣が増加していることから、この繁殖地形成初期には、ウミネコが北側断崖で優先していたものが草付き斜面に移動した可能性がある。

これらのことから牧場内の環境が、草地の中に露岩が点在し北部海岸域の断崖地形に似通っていることで新たな繁殖地の形成地となったことが考えられる。しかし、これらの環境を併せ持つ地域は他にも北部海岸域繁殖地から牧場内繁殖地までの8 Kmの間に存在しているにも関わらず、繁殖地形成が見られないことから、他の要因についても考える必要がある。例えば草地の草丈が自然下とは違い、放牧により一様に低くなっていることがある。海岸側の繁殖地でも、草丈の高い箇所より低い箇所に営巣が多い傾向にあった。

おわりに

以上のように、これまでの調査の結果から考えられる事柄を述べてきたが、これらは推測の域を脱してなく、現在のところ明確な要因や関連性は見出せない状態である。

繁殖地の消滅や移動がどのようにして起こるのか、また現在増加しつつあるオオセグロカモメの少数個体による営巣がウミネコ繁殖地にどのような変化を生じさせるのか、今後の調査がさらに必要である。

最後に、この調査に協力していただいた日本野鳥の会道北支部会員の志水顕氏、保村正樹氏、高田誠氏、そしてバンディングに特に指導協力していただいた苫小牧市の三浦二郎氏には、紙上をお借りしてお礼を申し上げます。

引用文献

西谷栄治、小杉和樹、1988：ウミネコのコロニーについて。日本野鳥の会道北支部報、No2：12～18

小杉和樹、1988：利尻島の鳥。利尻町立博物館年報、No7：43～54

- 小杉和樹, 1989: ウミネコのコロニーについて
(2). 日本野鳥の会道北支部報, No3: 43
~46
- 早稲田大学生物同好会, 1980: 利尻島の動植物.
早稲田生物22
- 綿貫豊, 近藤憲久, 中川元, 1988: 北海道周辺に
おける海鳥繁殖地の現状. 鳥, 37: 17~32
- 近藤憲久, 橋本正雄, 綿貫豊, 1986: ユルリ・モ
ユルリ両島における鳥類相の変化. 根室市博
物館開設準備室紀要, 第1号: 33~46

Breeding status of Black-tailed Gull in the
Rishiri Island.

Kazuki-Kosugi